

『老子』第一章の身体性 －忘れ去られたもう一つの解釈－

山田 俊（熊本県立大学、中国思想史）

- 漢字の一つ一つが持つ情報量は膨大であると言われ、それが漢詩などの奥深さを醸し出しているとされている。
- しかし、それは、一つ一つの漢字が本来持っている情報量ではなく、長い時間に於いて、様々なテキストの中で、一つ一つの漢字に対して読者が様々な読み込み方をして来た結果であって、その読み込みパターンを集約するとその情報量は膨大となるのである。
- 従って、何の知識も持たない読み手がある漢字を前にした時、その漢字が提供してくれる情報は極めて少ないと言える。
- 即ち、漢字で書かれたテキストの解釈には、読者の知識・教養・体験に基づく部分が相当程度の量を占めることになるのである。
- こうした解釈の場合、特に、身体的な解釈を要求される場合、それは書き手自身の身体体験が前提となって書かれたテキストであることが多いため、読み手にも同様の体験が有ることが前提されており、読者は自分自身の身体体験に基づき、それが書き手の体験と同種のものであるという前提に立って、テキストを解釈していかなければならない。
- しかし、身体感覚とは極めて個人的なものであり、第三者が外側から視覚や聴覚で感知出来ない場合が多いことから、当時者と第三者との間で共有されていると思われる身体感覚は幻想である場合も多い。
- 更には、たとえ幻想であったとしても、ある種の共同体で身体感覚が共有されていた場合、その集団に属さない者にとり、その身体的感覚は全く意味をなさず、その価値が全く理解されない場合が有る。その者にとり、彼らの身体感覚に基づく思想は、全く意味の無いものとなるのである。
- そうした事例を一つ。

『老子』の冒頭第一章の文は『老子』の中で最も知られた文であろう。原文と標準的な訓読は以下の通りである。

道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始、有名万物之母。故常無欲、以觀其妙、常有欲、以觀其徼。此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄、衆妙之門。（『老子』第一章）

道の道とすべきは、常の道には非ず。名の名とすべきは、常の名には非ず。名無きは天地の始め、名有るは万物の母。故に常に無欲にして、以て其の妙を觀、常に有欲にして、以て其の徼きょうを觀る。此の兩者は同じきより出でて而して名を異にす。同じきこれを之を玄と謂う。玄の又た玄、衆妙の門。

この文をどの様に肉付けしながら読み込んでいくのかは、完全に読者に任されているのだが、最も標準的な解釈に基づくものとして、近年刊行された蜂屋邦夫氏の解釈を示しておく。

これが道ですと示せるような道は、恒常の道ではない。これが名ですと示せるような名は、恒常の名ではない。天地が生成され始めるときには、まだ名は無く、万物があらわれてきて名が定位された。そこで、いつでも欲がない立場に立てば道の微妙で奥深いありさまが見てとれ、いつでも欲がある立場に立てば万物が活動するさまざまな結果が見えるだけ。この二つのもの—微妙で奥深いありさまと、万物が活動しているありさまは、道という同じ根元から出てくるものであるが、(微妙で奥深いとか活動しているとかいうように)違った言い方をされる。同じ根源から出てくるので、ほの暗く奥深いものと言われるが、(そのように言うと道の活動も万物の活動も同じになるから、)ほの暗く奥深いうえにも奥深いものが措定されていき、そのような奥深いうえにも奥深いものから、あらゆる微妙なものが生まれてくる。

(蜂屋邦夫『老子』pp.11-12。岩波文庫、2008年)

この解釈は、基本的には三国・魏の王弼おうひつ(226～249)の注釈に基づくものであろう。僅か24歳で逝去したこの早熟の天才の解釈が、その後、『老子』が読まれる際の世界標準となったと言うことが出来る。その姿勢は所謂「義理」によって解釈するというものであり、形而上学として『老子』を読み込んでいくというものである。それは本来は、王弼が生きた時代の人々のテキストの読み込み方を反映した、一つの姿勢に過ぎなかったはずのものである。

我々は『老子』というテキストを読む時、王弼の姿勢を前提にすることが多い。

しかし、それは一つの立場でしかない。たまたま、今に至るまで、王弼の解釈が標準となっているに過ぎないのだ。一方、我々の手元には唐の時代の仏教徒が書いた次の様な史料が残されている。

尋漢安元年歳在壬午、道士張陵分別黃書云、「①男女有和合之法、三五七九交接之道。②其道真決在於丹田、丹田者玉門也。唯以禁秘為急、不許泄於道路。道路溺孔也。呼為師友父母鼻根之名」。又云「女兒未嫁者、十四已上有決明之道」。故注五千文云「③道可道」者、謂朝食美也。「非常道」者、謂暮成屎也。「兩者同出而異名」、謂人根生溺。溺出精也。「玄之又玄」者、謂鼻與口也」。陵美此術、子孫三世相繼行之。④汝法如是穢亂生民。若觀百姓依汝法行、則不孝不恭。世出豺狼之種、無礼無義。（『辯正論』、『大正新脩大藏經』第52冊、531頁下段）

これは、後漢の末頃に活動した張陵という人物を頭目とする「五斗米道」という道教的宗教団体に就いて言及したものである。「五斗米道」の大規模な反乱により後漢は衰退し、その寿命を縮めたとされている。「五斗米道」は最終的には、曹操によって平定された。

この「五斗米道」には色々な宗教活動が有るのだが、その一つが男女が性を交わすことで不老不死を達成するというものである。①「男女有和合之法、三五七九交接之道」と有るのがそれである。「三五七九」とは「二十四」を分解した数で「二十四節氣」を意味する。つまり、「二十四節氣」に併せて男女が性を交わすことで、不老長生を達成するというのである。この辺りは、自然の流れと人間の身体的変化を同調させるという思想に基づいている。②「其道真決在於丹田、丹田者玉門也。唯以禁秘為急、不許泄於道路。道路溺孔也」とある文中の「玉門」とは女性の性器を、「溺孔」は男性の性器を意味する隠語である。つまり、「男女和合之法」では、男女が性を交わすが、男性は射精をしてはならない、という意味なのである。

この様な身体的、或いは性的な教理を備える「五斗米道」は、その一方で、『老子』（＝「五千文」）を根本經典として崇拜していた。彼らの『老子』解釈の姿勢は今ではほとんど分からないのだが、ここに僅かに残るものを見るならば、③「故注五千文云『道可道』者、謂朝食美也。『非常道』者、謂暮成屎也。『兩者同出而異名』、謂人根生溺。溺出精也。『玄之又玄』者、謂鼻與口也」と有り、『老子』の「道可道」を「朝食は朝の時点では美しい」という意味とし、「非常道」を、「そ

れが暮れには糞となっている」とし、「兩者同出而異名」を「男性の性器は一つだが尿も精も出す」とし、「玄之又玄」を「鼻と口」としている。即ち、『老子』の第一章の解釈を、身体的レベルから読み込んでいることが分かる。『老子』というテキスト自体が自ら提供する情報量は極めて少なく、「五斗米道」という共同体の中では、この様な身体問題としての解釈が生み出され共有されていたのである。

しかし、この『辯正論』という文献が唐の時代の文献で、唐代からこうした過去の『老子』の解釈を振り返る時、④「汝法如是穢乱生民。若觀百姓依汝法行、則不孝不恭。世出豺狼之種、無礼無義」と、こうした道術は民を汚し乱すものであり、「不孝不恭」である、と価値づけされることになる。後漢の時代の「五斗米道」という共同体が共有していた身体的感覚を、唐代の仏教徒が追体験し、それを同様に理解することは無理であった。彼らには、「五斗米道」の『老子』解釈の積極的意義は理解出来なかったのである。それは我々にも理解出来ないものかもしれない。そして、『辯正論』の作者は、男女に別が有ることを「正統」とする儒教的通俗的な倫理観に立ち、或いは、肉体を極端に不浄なものとして否定する仏教の価値観に立ち、その観点からこうした「男女交接の術」としてのテキスト解釈を否定することしか出来なかったのである。

もしかするならば、男女の関係に就いてより大らかな意識を持っていたかもしれない「五斗米道」共同体に於いて、『老子』というテキストのこの様な身体的な解釈は積極的意義を持っていたのかもしれない。しかし、それは、やがて切り捨てられ忘れ去られてしまったのである。以後に主流となった王弼の解釈からは、身体性という視座が削ぎ落とされ、それが標準となっていたのである。

我々は『老子』というテキストを通じて、どこまで、古代中国の身体感覚に肉薄することが出来るのであろうか、大きな問題であると思われる。